

脾臓細胞を使った免疫活性試験

<試験方法と内容>

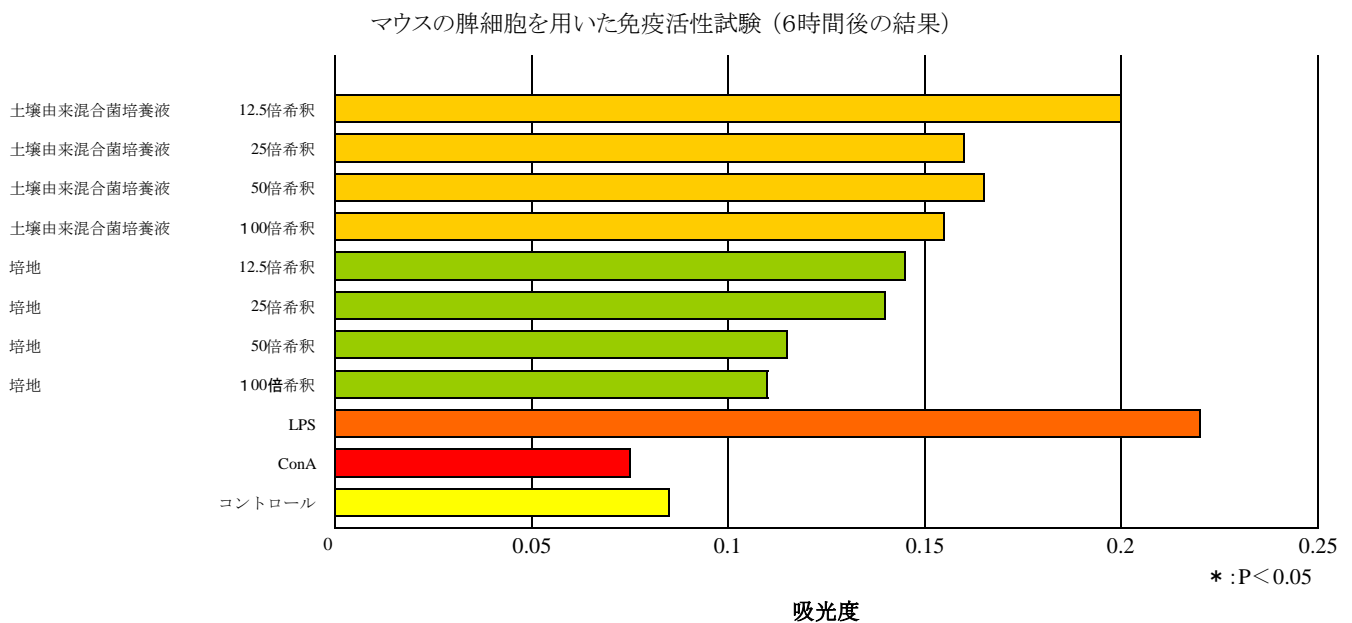
ICR 系マウスから定法に従って抽出した脾臓細胞を、培地（微生物を培養していないもの）及び土壌由来混合菌培養液に添加し、450nm の吸光度を測定することによって免疫活性を調査した。

また、免疫細胞を刺激する物質である ConA（コンカナバリン A）及び LPS（リポポリサッカライド）の免疫活性も調査した。

<結果>

コントロールに比べると、LPSでは免疫応答が有意（ $p < 0.05$ ）に上昇した。また、培地を用いた場合にも免疫応答の上昇が認められた。特に、12.5倍及び25倍の希釈倍率においては、有意（ $p < 0.05$ ）に免疫応答の上昇が示された。このことから、培地そのものにも免疫活性を上昇させる成分が含有されていることが確認された。

土壌由来混合菌培養液では、コントロールに比べて有意（ $p < 0.05$ ）に免疫応答の上昇が認められた。その上昇割合はいずれも培地よりも高かったことから、土壌由来混合菌培養液は、ICR系マウス脾臓細胞に対する免疫応答を有意に上昇させることが明らかになった。また、濃度依存的に免疫応答を上昇させる傾向があった。



神戸医療機器開発センター当社研究所にて調査

注 1) LPS（リポポリサッカライド）：グラム陰性細菌細胞壁外膜の構成成分

注 2) ConA：ナタマメの含有成分、リンパ球分裂促進活性を有する。